

CULTURE WATCH

MOVIE

世界を知る名画

私たちを取り巻く環境は日々、変化している。
世界が抱える多くの問題と向き合うために、
優れたドキュメンタリー映画の存在を知ってほしい。

鈴木糸子^{＝文}
Text by Itoko Suzuki



世界は今、さまざまな課題と試練を背負っている。地球規模の食糧問題や自然災害、利権や汚職を含んだ国際政治、宗教・民族の違いから生まれる多くの紛争や迫害。日々ニュースで目にする事柄でありながら、日常生活の忙しさにまぎれてじっくりと考える機会を作れず、頭の中を素通りし、ひいては無関心になってはいないだろうか。しかし、こうした問題は本来、私たちの生活の延長線上にあるものであり、一人でも多くの人に関心を向けることで問題が改善されるもの。また、国際情勢や社会の流れを掴むことで未来のビジョンを描けることを考えると、知らず知らず無関心に陥ってしまうことに、もどかしさを感じる人も少なくないだろう。

しかし、こうした問題と向き合うためには、必ずしも専門的な知識を極めることが必要とは限らない。本や雑誌の中から興味のあるテーマとの出会いがあったり、家族や友人との何気ない会話の中で自分なりの考えを深めたり。最初からあまりハードルを上げすぎず、まずは興味を持ち、少しでも知ろうとすることから始めてみてはいかがだろうか。気軽にアプローチできれば、世界レベルの問題も、自分と関わりのあることとして捉えられるに違いない。

そんなアプローチのひとつとして注目したいツールに、映画がある。最近では、内戦や難民、国際政治などの社会問題を扱った作品も多く登場し、知的好奇心が刺激されると同時に、地球が抱える問題への関心を深めてくれるはず。サ

スペンフルなストーリーの中にシエラレオネの内戦を描いた『ブラッド・ダイヤモンド』はアカデミー賞のノミネートでも話題を集めた。ドキュメンタリー作品では、社会正義を目指してルワンダや旧ユーゴスラヴィアの国際戦犯を裁く検事の実録『カルラのリスト』など、問題提起に優れた映画が数多く制作されている。視覚にダイレクトに伝わる確かな映像、問題を分かりやすく伝えるプロット、そこに力強いメッセージが重なり合い、観た後には私たちにさまざまな想いを抱かせてくれるはずだ。

「世界には紛争や深刻な人権侵害で故郷を追われた難民が数多くいます。そんな現状を知るためのひとつとして、ドキュメンタリー映画の存在があります。平和な日本に住む私たちにとって、世界が抱える問題をまず“知る”ことが次の行動に繋がる第一歩なのです」(日本 UNHCR 協会事務局長 根本かおるさん)という声もあるように、私たちが向き合おうべき問題との出会いは、地球の未来を変える力すらも含んでいる。ちなみに、6月20日は「世界難民の日」。この日から、迫害や紛争を逃れて避難生活を強いられる世界の難民問題を考えるドキュメンタリー映画を集めた「難民映画祭」が行われるので、足を運んでみるのも良いだろう。

世界について深く知ると同時に、自分のアイデンティティを確認できる、優れた映画作品との出会い。そこから、世界はもっとと広がり、自分の進むべき道筋が見えてくるかもしれない。

第3回を迎える今年の難民映画祭では、ウガンダ内戦の最中に力強く生きる子どもたちをテーマにし、サンダンス映画祭ドキュメンタリー部門監督賞を受賞し、アカデミー賞にもノミネートされた『ウォー・ダンス』(右、今秋公開予定、配給IMAGICA TV)やアフガニスタンを舞台に感動的なヒューマンドラマを描いた『君のためなら千回でも』(中2点)、『希望』(左、仮題)など、普段知ることのできない現場の状況や歴史を目にすることができる映画が約40作品、お披露目される予定だ

Information Contact

●第3回難民映画祭 <http://www.refugeefilm.org>